

# 中国発の人形劇 台湾の象徴に

台湾で、対岸の中国・福建省から渡ってきた人形劇「布袋戲」(ホーテ)が独自の進化を遂げ、台湾のイメージを象徴する伝統芸能として根付き始めている。独特のセリフ語りや、近代化する人形の容姿も特徴的で、コスプレにまで登場。当局が伝統芸能として保護に動き、企業形態をとって海外進出する劇団も現れた。



「霹靂布袋戲」の黄強華董事長が手にする伝統的な布袋戲の人形(左)と最新の人形

## 世界 いまを刻む

### 公的な保護も

### 衣装・物語、独自に進化

「ああ、閻魔(えんま)大王に連れ去られてしまふ……」。京劇の登場人物をデフォルメしたような身長三〇センチほどの人形が動く。台湾北部の台北県新莊市にある「閻帝廟(びょう)」。前の商店街で十七日、廟が祭る「三國志」で有名な武将・関羽の誕生日を祝い、唐の建國を巡る諸侯の物語が「小西園掌中劇団」による布袋戲で演じられていた。

夕立にもかかわらず雨宿りしながら見る観客の中には、車で一時間ほど

かかる台北市内から駆けつけた男性の姿も。布袋は中国語で「大きな袋」。中華民俗芸術基金会の呉明德理事(41)によると、人形を大きな袋に入れて運んだことにちなむ命名といい、福建省で生まれ、十九世紀初めから二十世紀初めにかけて台湾に渡来した。公用語の北京語ではなく、福建方言から派生した庶民の言語「台湾語」で演じるのが特徴。中国古来の物語を下敷きに、ラブストーリーやコメディの要素を加えた大衆芸能に育ってきた。

が、中国では三、四人が語るセリフや歌を、台湾では一人が担当する形で発展。約二時間で十人ほどの人物が登場した小西園の劇も、独特の節回しで一人が演じきった。団員の洪啓文さん(41)は「一人で演じることが芸術性を高めている」と誇らしげだ。

ピーク時に九百ほどあった劇団は、今は百ほどに減り常時活動する劇団は十前後だが、注目度は高まっている。行政院内閣)新聞局が二月、「台湾のイメージを探せ」と題して実施した住民アンケートでは、布袋戲が十

三万票余りを獲得して一位となった。当局が対中交流の実務を委託する海峡交流基金会は二〇〇四年から夏休みに中国から帰省したヒジネスマンの子女に、布袋戲を紹介する講座を始め、今年も小・中学生百人余りが参加。自らは中国人とは違つとする「台湾人意識」を抱かせる芸術として保護・普及を進めている。

「はい、撮り直し」。今どきの「イケメン」風の顔に、身長も八〇センチ前後まで伸びた人形が、刀を合わせると火花が散る。株式会社形態をとる有力劇団「霹靂布袋戲」が台湾中部・雲林県虎尾鎮に持つ約二万平方メートルのスタジオでは、ケーブルテレビ(CATV)に供給する番組を制作中。

伝統劇団は約十人が一組で演じるが、霹靂は約二百人で構成。特撮のヒーロー物に近く、登場人物のコスプレを楽しむ若者ファンも多い。

二月には英語版が米国のCATVで放映された。〇八年末をめぐりに二作目の映画を完成させ、日本でも配給する考えだ。異端視する向きもあるが、霹靂の四代目である黄強華董事長(51)は「百年後には我々が伝統になっていくかもしれない」と意を介さない。

呉理事も「コスプレ愛好家も、布袋戲の正統なファン」と歓迎。南国らしい台湾住民のおうような気質も手伝って布袋戲はさらに進化を続けそうだ。(台北)山田周平

日本経済新聞

2006年(平成18年)7月23日(日曜日)